

水中の小さな命である「淡水生プランクトン」の観察は、肉眼では見えにくい小さな生命が、1滴の池の水の中に、実におびただしい数いることを実感できる、唯一の活動です。一方で、5年生で学ぶ「メダカの成長」では、「食べる」「食べられる」という食物連鎖の一つの「階級」としても扱われます。池や川にいるメダカや小魚は、ヒトが食べ物を与えなくても生き続けます。そしてオスとメスがいれば、卵が育って稚魚も生まれます。その生命の営みを支えている存在の一つがプランクトンなのです。

メダカは「植物性プランクトン」も「動物性プランクトン」も食べます。教科書ではメダカがミジンコの仲間を食べる一瞬や、メダカのメスが卵を持ったまま泳ぐ姿の写真が紹介されています。ところが、その餌になっているほうの「ミジンコ」にも、卵を持った個体が見つかることがあります。この日も、数は少なかったですがケンミジンコやミジンコ（ネコゼミジンコやゾウミジンコ）のうち、卵を持った個体がいくつか見つかりました。もちろん、そういう顕微鏡にはすぐに列ができて、大騒ぎになります。

ある子どもは「プランクトンも卵産むのか〜！メダカと同じじゃん！」と言っていました。食べる側のメダカが卵を産んで命をつないでいるように、食べられる側のプランクトンにも同じような営みがある。これは子どもたちにとっては大変な驚きであり、大発見でもあったと思います。動画の最初に大きなミジンコのそばを通り過ぎる小さなミジンコは「カイミジンコ（貝ミジンコ）」です。

(2025 年 7 月上旬／北区立東十条小学校)

